

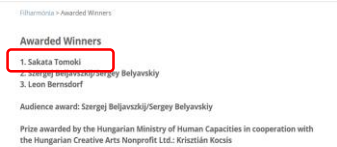
阪田知樹さん(ピアノ)応援レポート オール・リスト・プログラム 2017年4月27日(木)19:00開演 浜離宮朝日ホール

2016年フランツ・リスト国際ピアノコンクール優勝記念

フランツ・リスト国際ピアノコンクールは1933年に始まった歴史あるコンクール。ハンガリーのブタペストにある1875年にリスト自身が設立したリスト音楽院で、5年に1度開催されている。2016年は偉大なピアニストである作曲家フランツ・リストの没後130年を記念し、その名を冠した。審査員は、書類と録音された曲を聴く書類審査から85人を選ぶ。予選、セミファイナルを経て、わずか6人がファイナルに臨んだ。ファイナルではソロとオーケストラとのコンチェルト、2曲を演奏する。2016年は、9月2日の演奏順の抽選から、11日の受賞者発表とガラコンサートまでの10日間の長丁場だった。阪田さんはこのコンクールで、日本人の男性ピアニストとして初の優勝に輝いた。



オーケストラをバックにファイナルで演奏する阪田さん
(filharmonia HPのYouTubeより)



オーケストラとのコンチェルト演奏直後の阪田さん。聴衆の大喝采を浴びた。
(filharmonia HPのYouTubeより)

この日のプログラムは、この優勝を記念してすべてリストの曲。

◆プログラム

連弾(シューベルト/リスト)
ピアノ・ソナタ 短調
ハンガリー狂詩曲 第12番
パガニーニによる大練習曲 第3曲「ラ・カンパネッラ」
スペイン狂詩曲
愛の夢 第3番
歌劇「ノルマ」の回想(ベッリーニ/リスト)

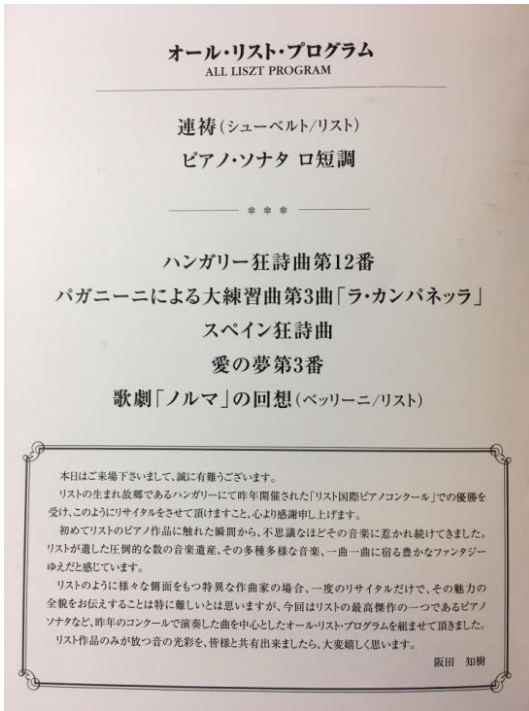
◆アンコール曲

シューマン/リスト: 献呈
ラフマニノフ/阪田知樹: 私は彼女のもとにいた Op.14-4
J.S.バッハ: 小前奏曲 短調 BWV934

Tomoki Sakata
Piano Recital
All Liszt Program

2016年フランツ・リスト国際ピアノコンクール優勝記念
阪田知樹 ピアノ・リサイタル
～オール・リスト・プログラム～
2017年4月27日(木) 19:00開演
浜離宮朝日ホール
7:00p.m. Thursday, April 27, 2017 at Hamarikyū Asahi Hall

主催: 朝日新聞社/ジャパン・アーツ
協力: オクタヴィアルレコード



阪田さんの演奏が始まった。
優しく、力強く、細く、太く、深く、軽く、明るく、重く...
一つの鍵盤からこんなにも色々な音色が出るものなのか。

同じ楽譜を弾いても、演奏者によってまるで異なる曲になる。阪田さんの音色は基本、優しい。のびやかで透き通っている。耳に心地よく、聴く人を包み込むよう。

聴いているだけで悲しくなったり、嬉しくなったり、楽しくなったり、暗くなったり。そう感じさせる表現力はどこから来るのか。

そして、まるで指が20本も30本もあるかのような躍動感。歌劇「ノルマ」の回想の最後は、阪田さんも立ち上がりそうになったり、手を振り上げたり。圧巻！現実をすべて忘れ、引き込まれてしまい、気が付くと演奏が終わっていた。もっと聴いていたい、と思った。

聴衆は、リストコンクール優勝者の演奏を生で聴けた幸福感と興奮に満たされて、しばらく声がなかった。そして、スタンディング・オベーションとブラボーの声。

特集

このような演奏を聴くと、どうしても演奏者に聴きたいことが次々と浮かんでくる。
直接阪田さんに質問すると丁寧な答えが返ってきた。貴重な生の声。

Q.1 「2016年フランチ・リスト国際ピアノコンクール優勝記念」というプログラムでしたが、今日、演奏するにあたって特に感じるものはありましたか？

A. 今回演奏させていただいた曲のほとんどが、去年のコンクールでの演奏曲でした。コンクール優勝記念リサイタルの名の下、それらを今回まとまって演奏させて頂いたため、コンクールの時の緊張感を思い出しての特別な演奏会になりました。



Q.2 今日はオールリストのプログラムでしたが、阪田さんにとってリストという作曲家はどのような存在ですか？

A. 私が13歳の時に初めてリストの音楽に向かい合ってからというもの、常に惹かれ続けている作曲家、それがリストです。とかく彼のピアノ作品の華麗な超絶技巧が取り上げられてしまいますが、彼が多くの若い音楽家を育てたことや、晩年に時代の先を行く作品を多く遺したことは、あまり知られていません。常に彼が作曲を通じて音楽の新たな可能性を模索していたと同時に、音楽と音楽界に対して常に献身的であったことが、音楽家としてだけでなく人間としての彼の懐の深さを物語っています。リストは、自分にとって理想の音楽家の一人です。

Q.3 ハンガリーでリストを弾くのと、日本でリストを弾くのとでは何か違いますか？

A. ハンガリーでは、やはり自分たちの国の作曲家という思いで聴かれている方が多いからでしょうか、リストの作品に対する反応が大きいように感じます。

先日4月27日のリサイタルの時には、聴きにいらして下さった皆様が、とても集中して耳を傾けて下さり、作品に寄り添って聴いて下さっていたように感じたことが、非常に印象的でした。

Q.4 今日はどういった演奏を目指して臨まれたのですか？

A. 自分の中で常に大事な位置を占めているリストの音楽の様々な面をお伝え出来るように、そして、それをきっかけに一人でも多くの人にリスト作品の魅力をお伝え出来たら、とって演奏会に臨みました。

特に口短調ソナタは、長大かつ難解と思われることの多い作品ですが、純粹に作品の美しさ、素晴らしさを感じて頂ける演奏を目指して演奏会にむけて準備をしておりました。

Q.5 弾いていらっしゃる時は、何を感じながら、弾いていらっしゃるのですか？

A. ホールに舞う音群の動き、響きの色合い、楽器の声、そして、作曲者の思い、でしょうか。

Q.6 今日聴きに来られた方々に、何を感じて欲しいと思って弾いていらっやっただのですか？何か伝えたいものはありましたか？

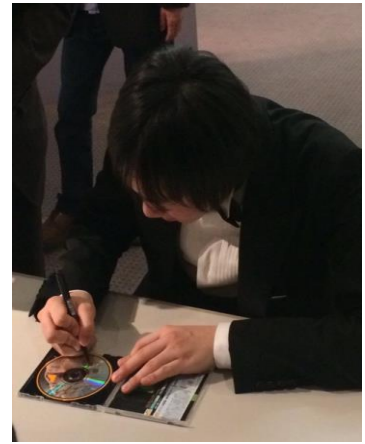
A. Q.4の答えにも少し書かせて頂いたので、重複するかもしれませんが、やはり、音と色の共感覚の持ち主と言われたリスト作品の魅力を一音そのものからも感じてもらえたらと思っておりました。そして、リスト音楽がもつ美しい歌心を伝えたいと思っていました。

Q.7 今日の演奏を今後の演奏活動にどのようにつなげていきたいと思っやっていますか？

A. 音楽は、常に終わりのない美を追求する芸術ですので、勉強をしていると常に新しい発見があります。特に自分が演奏会を通じて、思いもかけない瞬間に出会うこともあり、その後の演奏には想像も出来ない影響を及ぼすこともあります。ただ、それは、靈感的に突如沸々と泉があふれ出すかのように湧き出す、もしくは降ってくるものであるかのような気がしています。演奏を通じて新たに得たヒントを胸に、更なる芸術の高み、極みへとつなげていきたいと思っやっています。



リストと聞くと、超技巧派、激しい曲、というイメージだったが、阪田さんが弾くリストは、ゆるぎない技術の上に、美しさ、優しさ、温かさを感じる。演奏には人柄が表れるというが、こういうことなのか。阪田さんが言う、「リスト音楽が持つ美しい歌心」は、確かに聴衆に伝わっていた。阪田さんの、終わりのない美を追求する姿勢と、純粹に音楽を愛する気持ちを見ると、これからも大きく飛躍し、羽ばたく演奏家だという確信が持てる。これからも楽しみで、目が離せない。



演奏後、サインや握手を求めて長い列ができた。一人一人と笑顔で対応する阪田さん。この温かい人柄と謙虚な姿勢が演奏、音色に表れていた。

PROGRAM NOTES

音楽評論家 寺西基之

シューベルト/リスト：連弾 S562/R247

早くからピアノの名手として知られたフランツ・リスト(1811-86)はピアノの名技性の追求の点で音楽史上重要な役割を果たした。彼のそうした面を示すピアノ曲のジャンルのひとつに編曲曲があり、様々な作曲家のオペラや歌曲などを彼はピアノという楽器の特性を生かして編曲している。フランツ・シューベルト(1797-1828)の歌曲も幾つか取り上げており、この「連弾」(連弾=リタニア、同祭と会衆が交互に唱える繰り返しの形式)もその一つ。原曲はシューベルトが1816年に作曲した歌曲(J.G.ヤコビ詞D.343)で、リストはその歌唱旋律を初めは低音部に、途中から高音部に裏で影で編曲している。

リスト：ピアノソナタ 短調 S178/R21

ロシア出身のイーゴル・ストラヴィンスキーは当時のロマン主義の思想に呼応して、新しい音楽の可能性を様々な探求に探求した。彼の革新的な実験が19世紀後半の後期ロマン派の音楽の展開に与えた影響は測り知れない。中期の1852年から翌年にかけて作曲されたこのソナタも、彼がそうした姿勢が如実に現れた傑作である。古典的なソナタの形をそのまま踏襲するのではなく、全体をソナタ形式の自由な応用のうちに大規模な単一楽章でまとめつつ、しかもその中にさらに伝統的なソナタの多楽章的な特質を盛り込むという新しい形式原理(先駆としてはシューベルトのピアノ曲「さすらい人幻想曲」があるにせよ)を確立し、そこにロマン主義的な革新的な表現法の可能性を追求している。特に注目されるのは、幾つかの主題を変容しながら回帰させる循環手法を用いて全体を劇的に展開している点である。この作品の標題的背景にファウスト伝説があるのではと見なす解釈もあるが、その真偽はさておき、このソナタの劇的かつ物語的な性格は文学と音楽の融合という当時のロマン主義が理想とした芸術のあり方をめざしたものと見えるだろう。

リスト：ハンガリー狂詩曲 第12番 嬰ハ短調 S242/R105c

リストは血筋こそドイツ系だったが、生地ハンガリーに対して母国としての特別な思いを抱いていた。彼がピアノのために書いた一連のハンガリー狂詩曲は、そうした母国への心情を示すジャンルで、ハンガリーに伝わるジプシー音楽の旋律と様式(チャルダッシュという舞曲の様式で、テンポの遅いラッサンと急速で激しいフリカスカという対照的な部分を持つ)をもとに、ピアノの名技性を盛り込んだ作品である。この第12番は有名な第2番や第6番などとともに特に演奏される名曲で、哀愁に満ちた重々しいラッサン部分と活気ある情熱的なフリカスカ部分がピアノ的テクニックのうちに発展する。

リスト：ラカンパネッタ S141/R3b

若き日のリストは、超絶的な技巧で一世を風靡したヴァイオリニストのニコロ・パガニーニ(1782-1840)から多大な影響を受け、パガニーニの技巧をピアノに移すことでピアノの技巧性を開拓しようとした。こうして、パガニーニのヴァイオリン曲をピアノに編曲することでピアノの技巧性を追求した「パガニーニによる大練習曲集」(まず1838年にまとめられ、1851年に大幅に改訂)が生れた。とりわけパガニーニのヴァイオリン協奏曲第2番口短調の終楽章の主題である「ラカンパネッタ(鐘)」をもとにしたこの第3番はよく知られており、ピアノの鮮やかな技巧を披露する小品となっている。

リスト：スペイン狂詩曲 S254/R90

これもリストならではの技巧的華やかさに満ちた作品だ。彼は1844年にスペインに旅行をしたが、その時に知った素材と旅行の思い出が一つの土台となって、後年の1863年にこの狂詩曲を書き上げた。用いられた素材はスペインに古くから伝わる狂舞曲「フォリア」と、アラゴン地方の民謡・舞曲である「ホタルアルゴネーサ」で、こうした主題をピアノの名技性に結び付けて、鮮烈なまでの色彩の変化で華麗な楽曲に仕立て上げている。

リスト：愛の夢 第3番 S541/R211

リストのピアノ曲の中でも特にポピュラーなもの。1850年に出版された「愛の夢ピアノのための3つのワルツ」の第3曲だが、もともとは1845年頃に詩人F.フライリヒトの詩によって歌曲として作曲され、それをリスト自身がピアノ用に編曲したものである。リストの叙情的な一面を示すロマンチックな小品である。

ベッリーニ/リスト：歌劇「ノルマ」の回想 S394/R133

リストが当時の様々な楽曲をピアノ用に編曲したことは数回にも触れたが、それらは一般にバラフレーズと呼ばれるものが多い。バラフレーズとは、忠実に原曲に沿って編曲するのではなく、原曲の旋律を素材にしつつそれを自由に敷衍・発展させたものである。イタリアのオペラ作曲家ヴィンツェンツォ・ベッリーニ(1801-35)の代表的な歌劇「ノルマ」(1831年)の中の主題を用いたこの「ノルマ」の回想もまさにそうしたバラフレーズ作品で、1841年に書かれたもの。「ノルマ」の第1幕第1場と第2幕第3場(歌劇全体の冒頭の場と大詰めの場)から取った幾つかの主題をもとに、名技師やかなピアノ曲へと新たに仕立て上げた演奏効果満点の難曲である。

♪ 豆知識 ♪ (1811-1886)

フランツ・リストは、1811年ハンガリー生まれ。

1831年にパガニーニのバイオリン演奏を聴いて感銘を受け、自らも「ピアノのパガニーニになる」と、超絶技巧を目指したという。同じロマン派と呼ばれる同時代のショパン(1810-1849)やシューマン(1810-1856)らと親交が深く、また音楽的にも大いに影響を受けた。ピアニストとしては当時のアイドル的存在でもあり、女性ファンの失神が続出したとの逸話も残る。

